



# 受け入れを断らず 最期まで生活を支援

## 高齢者総合福祉施設潤生園 「みんなの家はくさん」 — 神奈川県小田原市 —

「人は人として存在するだけで尊い。真の福祉は人のいのちの尊さを知り、個人の人格を心から敬愛するところから始まる」とは、社会福祉法人小田原福祉会が展開する高齢者総合福祉施設潤生園の運営理念である。

潤生園は平成27年2月、新たな取り組みとして、サービス付き高齢者向け住宅と介護保険事業所を組み合わせた複合型施設を2つ開設した。小規模多機能型居宅介護事業所を併設する「みんなの家はくさん」を紹介する。



「食べることは命の源である」として食事を重視

## 地域福祉を支える 真摯な使命感

潤生園は、神奈川県西の玄関口である小田原市にある。昭和53年に特養ホームを設立して以来37年間、「市民を介護で困らせない」をモットーに、行動の軸足を「地域福祉の発展」に定め、高齢者と家族を地域で支えてきた。これまでに、施設内や地域で500人以上を看取った実績をもつ。

高齢者総合福祉施設は、本部と同じ建物にある特養ホームやシヨートステイのほか、グループ



思い出深い木工細工の衝立を置いたサ付き住宅の居室

ホーム「よりあいどころ田島」、戸建て民家を改装したデイサービス「やすらぎの家」シリーズ、地域交流の場「ふれあい処ひとやすみ」や、定期巡回・随時対応型訪問介護看護事業所をはじめとする各種訪問サービスなど、多数の事業所（介護保険事業所28カ所、サ付き住宅ほか5カ所）で構成し、市の中央部を南北に流れる酒匂川流域に広がる足柄平野のおよそ6km圏内に点在する。

理事長の時田純氏は、日本の福祉・介護界をリードしてきた一人だ。「地域の人たちが穏やかに最期を迎えることができるよう見届けるのが、私たちの責任だと思っています」と、ときに物静かに、また「介護保険給付から要支援者がはずされるのは、保険料を納めてきた高齢者に対する裏切り行為です」と、ときに憤りをあらわに語る。地域福祉を支えなくてはという強く真摯な使命感が、これだけ数多くのサービスを整えてきた原動力なのだろう。

要介護重度者の入居が優先される特養ホームには入ることができず、自宅で暮らすことも難しい独居の高齢者や、高齢者世帯を支

えるために、生活の基盤となる住まいとしてサ付き住宅を開設したという。

## 複合型施設の利点で 暮らしやすく

複合型施設「みんなの家はくさん」（以下、「はくさん」）は、建物に入ると、左手が事務所、正面が小規模多機能型の入り口、右手が2階のサ付き住宅への上がり口で、自動扉を入った先に階段がある。建物1階には、ほかに在宅療養支援診療所の内科クリニックと郵便局が入っている。

2階のサ付き住宅の空間は、木のぬくもりを感じる落ち着いた雰囲気を感じる。中央部には、居住者共用のミニキッチンが備えつけられ、テーブルとイスが置かれた食堂があり、ソファとテレビのあるリビングへと続く。食堂からは、カウンター越しにオープンキッチンが見える。14戸の個室は、中央部から放射状に延びる3本の廊下に沿い、それぞれ3室、4室、7室が配置されている。居室は



サ付き住宅のリビングでつづぐ利用者

広さ19・9×20・7㎡で、トイレ、洗面所、収納が備えつけられている。台所と浴室は、共用部にある。現在、サ付き住宅には、1組の夫婦を含む男性3人、女性5人の計8人が居住している。年齢は78〜85歳で、そのうち、要支援・要介護者は要支援1が1人、要支援2が1人、要介護1が2人、要介護4が1人である。4人は1階の小規模多機能型を、1人は他社のデイサービスを利用している。

25年前に大腸がん手術を受けて以降、人工肛門にパウチ（袋）を装着しているAさんは、医療依存度が高く、障害者手帳をもつ。骨折がきっかけで老健施設に入所していたが、入居者の多くが重度の要介護者や認知症という環境に



なじめず、「はくさん」に転居してきた。

食べることが大好きなAさんだが、腸閉塞を起こしやすく、これまでにも何度も救急車で緊急入院している。月に1度、1階のクリニックを1人で受診し、週1回の訪問看護では人工肛門の周囲の固くなりやすい部分のマッサージを受ける。

また、日常生活は、訪問、通所（デイサービス）、宿泊という3つの機能をもつ小規模多機能型のサービスを活用している。パウチを交換するために、ヘルパーが

毎日居室を訪問し、手伝う。お風呂は通常デイサービスで入るが、

パウチの内容物が漏れて身体が汚れたときは、ヘルパーが訪問し、サ付き住宅の共用部にある浴室でシャワー介助を行う。

デイサービスでは、話が合う友人Bさんがみつかった。Bさんの来所する日時に合わせてお茶を飲み、1階に降りたり、Bさんが2階のAさんの居室を訪問したりしているそうだ。

## 地域の人たちと

### 接点をもつ事業運営

サ付き住宅での暮らしにかかる費用は、家賃5万8000円、6万円、生活支援費4万5000円、共益費1万5000円、食費4万5000円で、1カ月

→ 家庭的な味わいの潤生園の昼食



↓ シニアのスタッフは利用者の相談にもなる。写真のスタッフは70歳



16万3000円、16万5000円がベースとなる。生活支援費は、食事ケア、生活相談、週1回の居室内掃除に充当される。小規模多機能型のサービスを利用する場合、要介護度により3403〜2万6849円が加算される。

サ付き住宅で働くスタッフが、隣近所の住人や、潤生園のほかの事業所でボランティアをしていた人であることも特徴的だ。4人の女性が毎日7〜13時と13〜17時の2交替で勤務し、調理のほか、共用部や居室内の掃除、入居者の話し相手などをしている。

潤生園では、「食べることは命の源である」との考えから、食事を重視している。昭和59年、日本で初めての介護食「ミルクプリン」を開発し、平成3年には日本栄養改善学会賞を受賞した。最近では、近隣への配食サービスにも力を入れている。

筆者も手づくりの昼食をいただいた。この日のメニューは、脂ののった鯖の塩焼きに、入居者が毎日水やりをして育てた、獲れたての茄子が入った炒めものが彩りよく添えられていた。ほかに、2種類の小鉢と具沢山の味噌汁。家



入居者が育てている茄子やトマト

庭的な味わいだ。土用の丑の日には鰻丼を提供できるように、地元のはな魚店と相談しているという。

食事を終えたあと、2人の女性がリビングのソファアに座り、副施設長を交えてしばらく歓談している姿がみられた。

## 対応困難者も受け入れ

1階の小規模多機能型の廊下を歩くと、木の香りがする。小規模多機能型は登録定員が25人で、通所の定員は15人、宿泊は9人で

■ 社会福祉法人小田原福祉会

高齢者総合福祉施設潤生園「みんなの家はくさん」

- 住所 〒 250-0001 神奈川県小田原市扇町3-26-28
- TEL 0465-35-2233
- 定員 サ付き住宅:14戸  
小規模多機能型:25人



ある。小規模多機能型は在宅生活を支援することが目的であるため、連泊は原則週5日までとしている。

だが、なかには宿泊（1泊2500円追加）を中心にサービズを利用する人もいる。肺がん末期で在宅酸素療法を行っているCさんが、その1人だ。本人は今も自宅での暮らしを強く望んでいる。自宅で息苦しくなると救急車で病院に搬送されるが、根っから

の病院嫌いですぐに逃げ出して自宅に戻ってしまう。平成27年3月、困り果てたケアマネジャーから「はくさん」に受け入れの相談があった。その時点で余命2カ月と宣告されており、すぐに利用が決まった。

疼痛管理が必要なためモルヒネを使用中で、徐々に体力が落ちていくようだ。取材当日の朝も、Cさんの主治医が診療を終え、「また痛むようでしたら連絡してください」と受付に声をかけて建物から出て行く姿をみかけた。

長くひとり暮らしをしていたCさんが自宅にこだわるのは、野良猫に餌をやるのをなよりの楽しみにしているからだ。息子から生活費の援助を受けて生活しているが、お小遣いの半分を餌代に使ってしまう。現在も週2〜3回、猫の餌やりで自宅に戻るCさんに、「はくさん」の職員は、Cさんの孫と分担し、ヘルパー訪問として付き添っている。

サ付き住宅と小規模多機能型を併設する「はくさん」の建物には、夜間帯、看護師はいないが、医療依存度が高い人も暮らしている。サ付き住宅に住む人の夜間緊

急連絡先は、1階の小規模多機能型となる。そのため、体調不良で夜間帯の見守りがとくに必要と思われる人には、あらかじめ小規模多機能型に宿泊してもらっている。

夜間のスタッフは、状況に応じて、24時間365日連絡可能な在宅療養支援診療所や訪問看護ステーションと連絡をとる。24時間365日連絡可能という条件を満たせば、主治医は必ずしも1階に併設されたクリニックの医師でなくても構わない。実際、Cさんのように、「はくさん」に転居する前と同じ主治医にかかっているケースもある。

緊急時の対応をスムーズに行うため、医療依存度の高い人はケアプランに訪問診療（医師による居宅療養管理指導）を月2回、訪問看護を週1回組み入れ、定期的な医療者がかかわるようにしている。

法人の経営本部副本部長で、「はくさん」の施設長を務める佐野光子氏から、「はくさん」で暮



1階の小規模多機能型

らすさまざまな高齢者の様子を覚えてもらった。不穏で大声を上げたり暴力をふるったりする、または弄便癖があるとの理由で、介護付き有料老人ホームから退去を迫られた高齢者など、世間一般では対応困難者とのレッテルを貼られた人たちも受け入れているという。

「試行錯誤ですが、徐々に、どんな方でも受け入れられる自信がついてきました」と話す言葉に、優しさがあふれる。地域に根づく高齢者総合福祉施設の真骨頂だろう。地域で暮らす高齢者と家族を支えるとの理念が現場に浸透しているのだ。潤生園の取り組みに、ケアの哲学こそが重要だと改めて気づかされた。

（シニアライフ情報センター・平岩千代子）